

る。

陳腐な表現になるが、大切なのは情熱なのだと感じた。情熱といっても、燃え立つようなそればかりでなく、静かだが決して消えることのないものも含めてである。戦後のGHQは、戦勝国による統治機関として絶対の存在であり、混血孤児の存在を表ざたにしたい彼らと闘うときは燃えるような情熱が必要であり、子供たちの身の上に絶え間なく降り注ぐ日常の困難に取り組むには、粘り強い静かな情熱を欠かすことができなかった。沢田氏は死の間際まで情熱を持ち続けて、2,000人近くの孤児を育て上げた。

コロナ問題が世界的にどのように推移していくのか、素人である私には到底わからないが、まだまだ長引くであろうことだけは察することができる。人の行き来だけでなくあらゆる経済活動が滞り、財政支出が増える中で、途上国の経済的困窮がますます深刻化してしまうのであろう。どうか静かな情熱を絶やすことなく、この困難を乗り越えていただきたいと思う。

さいたま支部だより



ミランクラブジャパン埼玉支部
支部長 堀内 順子

ナマステ

日頃より子どもたちのためにご尽力下さっておられる皆様ありがとうございます。
ネパールの事務局の皆様にも感謝いたします。

春よりの新型コロナウイルス感染のため、埼玉支部会の私たちも先が見えず、伝染拡大のニュースが流れるたびに、集まる予定を中止すること数回――子どもたちの激励のためにどんなことができるか、アイデアを持ち寄ることもできません。

日本の現状は、日々のニュースで知ることができますが、ネパールのコロナ禍の様子を、ネットでしか知ることができず、さらに詳しい様子が分かれば、と心配しております。

猛暑の中にも庭の隅からコオロギが鳴き始めました。コロナが多少でもおさまり、支部会がもてるようになることを。

会員の皆様のご健康をお祈りしております。

※ 活動場所が、9月より再開となりますので、また、お知らせする予定です。